

拝殿

拝殿は出雲大社の儀式が行われる場所であり、主祭神である大国主神に祈りを捧げます。本殿とは異なり、拝殿は一般に公開されることが多く、清めの儀式や健康・繁栄の祈願、供物の奉納などが行われます。現在の拝殿は、火災で焼失した後、その6年後の1959年に建てられたものです。第二次世界大戦の後に建てられた伝統的な木造の神社建築としては最大級のもので

拝殿の広さは約485平方メートル、高さは12.9メートルです。神社建築の中でも最も古い様式である大社造りを基本とし、切妻造の要素も取り入れています。本殿のような典型的な大社造の建築では、建物の入り口は切妻の壁（建物の短辺の一つ）に配置されています。これに合わせて、拝殿の南東隅には屋根庇（向拝）とおおしめなわが設けられています。

拝殿の大部分は檜でつくられており、屋根は銅板で覆われ、銅製の飾り金具（鬼板）が施されています。中央の棟持柱を支える礎石の重さは13トンで、愛知県岡崎市から400キロ以上かけて運ばれました。

また、本殿の修造の際には、大国主神の仮住まい、つまり仮の本殿となります。修造期間中、大国主神は本殿から拝殿に移されます。

拝殿のすぐ西側には、聖なる井戸があります。この井戸より汲み上げられた水は、本殿に祀られている神々へのお供え物に使われています。